

ベトナム、少数民族地域における コミュニティ・ベース・ツーリズムからの教訓

今井彬暁

キーワード：コミュニティ・ベース・ツーリズム、少数民族、ベトナム

1. 研究背景

観光は21世紀最大の産業になる、という見方さえも提示される現状において、その増大し行く影響に再度眼差しを向けることが要請されている。とはいえ、観光はその体系性の欠如から、学問の対象としても顧慮されることすら極めてまれな現象であり、またその歴史を紐解いてみるにつけ、少数派の積極的評価を除いては学問的にも長らく悪役の烙印を押される存在でしかなかった。その背景には、典型的な大型リゾート地に代表される大規模観光開発のイメージが人々の意識の中に観光という一側面的現象の表象を植え付け、ショッピングや食道楽に体现されるレジャーとしての活動こそが観光活動の本道であるという潜在意識を沈滞させてきたことがある。しかしながら、そうした大規模観光開発は現在の学問的探求においては観光という現象のもたらす弊害の最大化を具現化する形態、すなわちマスツーリズムと呼ばれる反省の対象として位置付けられているに過ぎない。そうした過去の悪弊に半鐘を鳴らすものとして、いまだ概念的範疇を脱していないまでも、それに代替する新しいツーリズム（Alternative Tourism）の模索が始められたのはそれほど遠い昔のことではない。コミュニティ・ベース・ツーリズムはこうした代替型観光の一形態として提唱されたものと把握して間違いはないであろう。そもそも、観光が大いなる誹謗中傷の担い手と成り得た経緯には、それが単純に大規模環境破壊の源泉たる活動を促進していたことにとどまらず、地域における経済的不平等の普及者、文化の破壊者、先進国による観光帝国主義の推進者、等々の位置付けを付与されることによって、環境主義者、文化人類学者等々の広範にわたる人種に敵意を刷り込むことに成功したからである。にもかかわらず、観光の本質的様態を正確に認識していたのはごく限られた批判者にとどめられ、多くは先の観光の一形態に過ぎない表象へと批判の矛先を向けているに過ぎない事実を把握していなかったことは現在の学問的探求のなかで次第に明かされつつある。

2. 研究手法および結果

本論文では、ベトナムをリサーチ対象地域と定め、ベトナム中部山間地域および北部高山地域に定住する少数民族によって行われている観光活動がもたらす影響を実地調査およびアンケートに基づいて分析することにより、現在の代替型観光における基本的命題、すなわち、観光のもたらし得る正の影響の最大化および負の影響の最小化、という挑戦がいかんにして可能となるかという問題に取り組んだ。観光からの影響を分析する過程で用いられた方法の一つとして、観光の影響を5つの側面に分類することによって、各影響を体系的に把握し、そうした各体系の位置付けおよび関係性を明示化した。5つの分類法としては、観光の政治的側面、経済的側面、社会的側面、文化的側面、そして環境的側面、という区分が用いられた。そうした分析過程を経て得られた結論は以下の二つである。すなわち、一つ目には、観光を地域に適用するにあたって、コミュニティ・ベースの概念、換言すると観光の政治的側面、つまりは観光のマネジメントを地域の手に乗せることは正の影響の最大化および負の影響の最小化に貢献する、ということである。二つ目には、観光の運営および発展に際しては、包括的な影響評価がコミュニティおよび観光活動の継続に不可避であり、それぞれの側面、特に社会的側面、文化的側面、そして環境的側面に対しては、観光活動がその許容量の範囲内に収められるような形で運営されていくことが不可欠である、さらにいえば、経済的利潤を妥協してでもそれら三つの側面を優先的に留意することが継続的運営に際して重要となるということが指摘された。

観光は地域発展に対する万能薬としての役割を担うには程遠い存在であるが、その功罪を正確に把握し、改善していくことは、観光活動がますます増大していく時代を生きる人間に課せられた責務の一つであろう。